ヴァチカン便り（37）

法王はアラビアへ

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

法王はアラビアへ

法王フランチェスコは、２月４日から始まった世界宗教のリーダーたち700人が集まった「人間はきょうだい」と銘打った国際会議に出席した。開催地はアラビア半島のアラブ首長国連邦のアブダビ。法王がアラビア半島に行くのはカソリックの歴史上で初めてのことだ。

法王は、イスラム・スンニー派の指導者であり、対話を重んじる人であるアフマド・アル・タイーブ師に迎えられた。彼は現状のままでは、世界は第３次世界大戦に向かってしまうのではないかと懸念を表明した。それに対して法王は「我々には２つのうち１つを選択するという余地はない。来るべき未来を共同して作り出すか、さもなければ未来はないと思う」と述べた。

アブダビの創立者記念会館で、世界の司教、イマム、ラビ、その他の宗教の代表者700人が集まっている前で、法王とアル・タイーブ師は、「世界平和のための人間きょうだいとその共存」「テロリズムを排除」「信仰の自由、個々の信条は別であっても自由の保障」そして「憲法において女性の権利を肯定」するというドキュメントに署名した。フランチェスコはイスラムとの関係を最重要視しており、個々人には平和のための道具になれと訴えている。

法王はさらに「いかなる暴力も許されない。例外なく罰せらなくてはならない。」「人間家族にとって自由のないということは奴隷のようなものだ。」「特に男女間の同等の尊厳と宗教の自由は信仰の自由を制限するものではない。」「宗教は暴力を容認し、テロを擁護する道具ではない。」「文化というものは憎しみを減らし、文明の成長を促進する。私は特に、現在のところ、イエメン、シリア、イラク、リビアの現状を考えねばならない。我々はそこから目をそらしてはならない。」と訴えた。

アラビア訪問地として、なぜ法王はアラブ首長国連邦を選んだのだろうか。ヴァチカンの中では、法王はなぜアブダビ選んだのかという疑問を持っている人がいる。中には、なぜカタールを選ばなかったのかという意見も聞かれる。

法王のアブダビ選択の動機は３つ考えられる。

① イスラム教代表者との話し合い。
② 特にアズハールの偉大なイマムでエジプト人のアル・タイーブ師に会えること、今回のアブダビの国際宗教会議の主催者との交友関係を深めること。
③ アラブ首長国連邦の90万人の信者（全員移民だが）に対し、信仰面において、大きな視野を与え、勇気付けること。

ヴァチカンは、第二ヴァチカン公会議以降、世界の各宗教と対話を深め、特にイスラムとの対話を重要視している。アル・タイーブ師は対話の相手として最適の人物と見ており、対話促進を決定づけている。アル・タイーブ師はパリに行った時に、イスラム過激派テロによるバタクラン劇場の襲撃事件の犠牲者の前に跪き祈りを捧げているのだ。

今回の法王のアブダビ訪問は、カソリックのなかでも、特にイスラエルのイエルサレムで2016年から活動し、信仰を指導する大司教ピエール・バッティスタ・ピッツァバッラは大歓迎の言葉を残している。「各宗派の宗教家や信仰者がお互いに何も話さなくて、さらには対話について一語も発しないのは、この世の終わりを告げていることになる。それではダメなのだ。」

大山鳴動、ネズミ一匹も出ず

カソリック世界における枢機卿、司教による小児愛症事件、性的虐待事件の多くは、今まで蚊帳の中に隠されていたが、前法王ベネディクト16世と現法王フランチェスコによって次々とそのベールが剥がされ、次第に世の中に知られるようになってきた。特に現法王の時代になって、次から次へと事件が明らかにされてきた。このような出来事は教会から一掃しようということから、法王の呼びかけで、世界の190カ国から枢機卿や司教がヴァチカンのシノドホールに集まり、この２月24日から３日間会議が行われた。そういう事件を起こさないようにという警告と勧告に終始したようで、具体的な解決策は出てこなかった。多くの人は非常に期待していたが、大山鳴動してネズミ一匹出てこなかった。ヴァチカンの外部のローマの街には、これらの事件の被害者がたくさん集まって街を練り歩いていた。テレビ局、新聞社の記者たちの質問に涙を流して事件を話していた人もいる。特にこの種の事件はアメリカでよく起きている。その数は大変な数になり、特にボストンはひどかったようだ。

アメリカ・ワシントンのテオドアー・マッカリック大司教は、枢機卿でありながら、未成年や成年を次から次へと愛してしまったのだ。現在88歳であるマッカリックは、法王から枢機卿の立場を剥奪され、現在は聖職者の資格でもなくなっている。また、1995年にはウィーンの大司教ヘルマン・グローエルが性的虐待事件に関係したことで更迭され、その後エディンブルゴのケイス・オーブリエンも事件を起こし更迭されている。さらにオーストラリア人の枢機卿ジョージ・ペルは、ヴァチカンで経済相をも務めた人だが、昔の性的虐待事件でシドニーの裁判所でその犯人と断定され、本年２月末のオーストラリアの法廷で有罪となり、懲役50年の刑に処された。

性は神からの贈り物

法王は本年１月末、世界若者集会が開かれたパナマからの帰国の便で、恒例の記者団の質問に答えた。特に性に関わる問題が出たのでそれを記そう。

質問：中南米では妊娠した若い女の子がたくさんいる背景に、教会が性教育を禁止しているからだというが、それは本当か。

答え：教会は何も性教育を禁止してはいない。学校でしっかり性教育をするべきだ。性は怪物ではない。愛するための神の贈り物である。性教育は理想的には家庭から始まり、特に両親との対話から始まるが、次第に親では難しくなるので、学校で教えるのが理想的だ。性を仲介とした商売をすべきではない。性によって人間失格ということを避けねばならない。

質問：中絶した女性にはどう話したらいいのか。

答え：中絶して泣いている人がいたら、こう話してほしい。「あなたの子は天国にいるよ。その子に子守唄を歌ってあげなさいよ。」と。